

房総の 文化財

VOL. 16

平成10年8月20日

財団法人 千葉県文化財センター

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai



発掘調査速報

日本最大の環状ブロック — 印西市泉北側第3遺跡 —

泉北側第3遺跡は、北総台地の北のはずれに近く、手賀沼から東に流れ出て利根川に注ぐ六軒川の支流、亀成川を北にのぞむ小さな谷の東側に続く標高24mの台地の上にあります。利根川本流から南へ直線にして2kmも離れていない所です。

周辺を見渡すと一番最初に目に付くのが携帯電話の電波塔です。塔の向こう側には大きなビルが建ち並び、21世紀への胎動を感じます。一方、遺跡の周りには桜の大きな木があり、キジが飛びかい、ヒバリの鳴き声が響きわた



印西市泉北側第3遺跡全景

っています。遺跡の西側の谷には湧き水を溜めている池があり、ザリガニが動きまわり、別世界に飛び込んだような錯覚におちいります。

発掘調査は平成9年9月から実施され、縄文時代早期の土器が含まれている地層と江戸時代の野馬堀が見つかりました。そして、今年度は地表から1m 50cmくらいの深さの関東ローム層の中から2万5千年前の旧石器時代の石器や石器の材料が集中している所=ブロックを見つけました。同じ深さで石器のブロックがいくつも見つかり、まるでドーナツのようにつながって、直径が70mにもなっています。このようなつながりは、考古学では環状ブロックと呼ばれています。この遺跡では、環状ブロックの内側に、さらに別の小さな石器のブロックもありました。環状ブロックは、まだ発掘の例が少ない貴重なものです。石器の材質には、安山岩・頁岩・チャート・瑪瑙・凝灰岩などの多くの種類がありました。剥片（石器を製作するときの破片）に混ざって、

石刃やナイフ形石器などの製品も見つかっています。

遺跡を発掘していると、当時の人々が生活した地面や発見された遺物に触れることで、2万5千年前に生きていた人々の息づかいが感じられるようです。

(竹田 良男)



環状ブロック

収蔵遺物コーナー

磨かれた石器と砥石 — 成田空港内遺跡より —

今回紹介する遺物は、新東京国際空港内の成田市東峰御幸畑西（空港No61）遺跡から見つかった「刃部磨製石斧」と、天神峰最上（空港No64）遺跡から見つかった「有溝砥石」です。

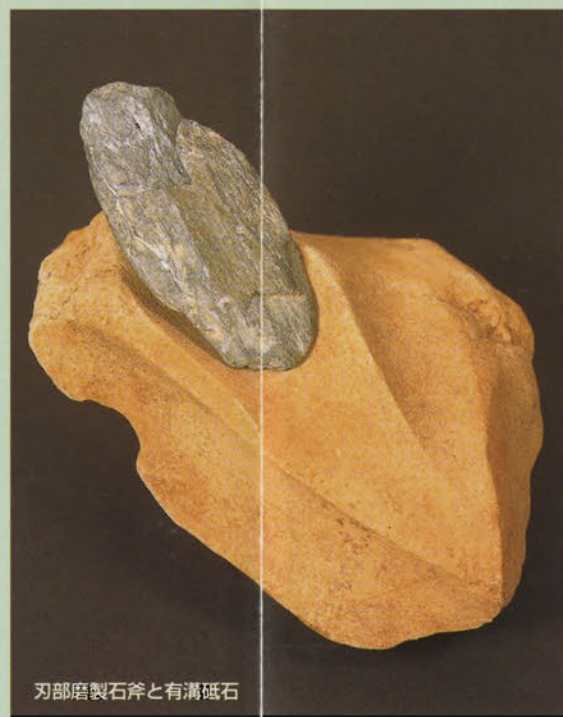
石斧は蛇紋岩製で、両側から刃の部分の磨かれています。石器が磨かれて作られるのは、世界史の上では、新石器時代（1万年以後）からとされていますが、日本の各地では、それより早く、旧石器時代の2万7・8千年前の地層から、写真のように、刃を部分的に磨いた石器が見つかっています。私たちはそのような石器を「刃部（局部）磨製石斧」と呼んでいます。

この石斧を磨く（研ぐ）のに必要なのが砥石です。砥石は、砂岩製で、上面に2条、両側面に各1条の溝ができています。ちょうど石器の大きさに合っているのが分かります。

刃こぼれなどによって切れなくなった時に、現代の私たちが包丁を研ぐように何度も研いで新鮮な刃を再生させたのでしょう。

一般的に石斧は、木の伐採や加工、骨や角の加工、皮なめしに使われたと考えられています。ところが、長野県の遺跡から見つかった刃部磨製石斧の刃の部分に付着した脂肪を分析したところ、ナウマンゾウやオオツノシカの脂肪が見つかったという人もいます。大型の動物の狩猟や解体作業に、この種の石斧が使われたのでしょうか。

千葉県内では、今回紹介したような石斧は約30点見つっていますが、有溝砥石は、千葉県餅ヶ崎遺跡、市原市草刈六之台遺跡から、1例ずつしか発見されておらず、大変珍しい資料といえるでしょう。（永塚俊司）



刃部磨製石斧と有溝砥石

◎遺跡今昔物語◎

むかし「東海道」いま「高速道」
～館山自動車道物語～

館山自動車道は、平成7年7月に千葉市から木更津市まで開通しました。この道路はアクアライン（東京湾横断道路）にもつながり、首都圏の地域間相互の連絡を促進する道の1つとして機能し始めています。この道路工事区域内には、25か所の遺跡があり、昭和63年に発掘調査が始まり平成6年に終了しました。その結果、古代の東海道*に連なる道の跡のほか、旧石器時代から中世までの貴重な資料を数多く得ることができ、西上総地域の歴史の解明のために新たな手掛かりを加えることができました。

(渡辺昭宏)

*東海道：古くは、都を出て相模国から東京湾の浦賀水道を渡って上総国に上陸して北上し、下総国を経て常陸国へ向かうのが東海道の本道でしたが、宝亀2年（771）に相模国から陸路で武蔵国を経て下総国に入る道筋に変更されました。



笹子城跡

最古のペンダント？

自分の身体を美しく飾りたいという思いは、遠い古のころから変わりはないようです。

写真は、四街道市出口鐘塚遺跡で発見された、旧石器時代の「垂飾様石製品」です。「垂飾」とは、ペンダントなどのように、紐を通して「垂らして飾る」装身具のことです。出土した地層の様子から、約2万8千年前に作られたものだと考えられています。大きさは、写真左が長さ約22mm、幅約21mmで、砂岩でできています。装身具というと、弥生時代や古墳時代の勾玉や管玉が有名ですが、それよりも2万年以上も前に「垂飾」らしい装身具が作られていたことは大きな驚きです。

しかし、穴を開けた部分がわずかしかなかったために、「垂飾」であったかどうかは意見が分かれており、

現時点では「垂飾様石製品」と呼んでいます。どちらにしても最古の装身具であることには間違いのないようですが、国内ではほかに出土した例は数例しかなく、判断を難しくしています。

(石田 清彦)



Q

この前見たテレビのニュースで、古墳からたくさんの三角縁神獣鏡が発掘されたと放送していました。あの鏡には、何か特別な意味があるのでしょうか。



(様々な表情の神像と霊獣像「橋井大塚山古墳と三角縁神獣鏡」京都大学文学部博物館図録より)

A たくさんの鏡を出土した古墳といえば奈良県天理市の黒塚古墳のことだと思います。見つかった鏡は34面で、そのうちの33面が三角縁神獣鏡だったのでさらに注目されることになりました。

神獣鏡とは、東王父、西王母などの中国の伝説上の神像と竜や虎などの霊獣の文様がある鏡で、その中で縁の断面が三角形をしているものを三角縁神獣鏡と呼んでいます。この鏡は、邪馬台国の女王卑弥呼が3世紀中ごろに中国の魏の国からもらった鏡ではないかと言われていますが、そうではなくすべて日本製だという意見もあります。

三角縁神獣鏡は、北は福島県から南は鹿児島県まで、日本各地の初期の古墳から450面以上も見つかります。奈良県では90面以上、

近隣の京都府、大阪府、兵庫県と当時の先進地である福岡県では40面以上見つっていますが、このような分布状況から、この鏡は、奈良に本拠を置くヤマト政権が、何らかの政治的意図をもって各地の有力な豪族に分け与えたものと考えられています。

千葉県では木更津市の手古塚古墳と香取郡小見川町の城山1号墳から1面ずつ見ついています。政権の中心から遠い当時の房総には、ヤマト政権とつながりの深い豪族が多くなかったことを物語っています。ただし、まだ発掘されていない古墳の中に、この鏡を副葬しているのではないかと推定される大型の前方後円墳が何基か存在することも忘れてはなりません。

(部 淳一・立和名 明美)



S=1/4

(三角縁唐草文帯四神四獣鏡「雪野山古墳の研究」報告篇より)



■表紙について

注口土器
(君津市寺ノ代遺跡出土)
縄文時代後期、注ぎ口のついた土器

撮影：堀越知道

房総の 文化財

VOL. 17

平成10年11月30日
財団法人 千葉県文化財センター
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811(代)
FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai

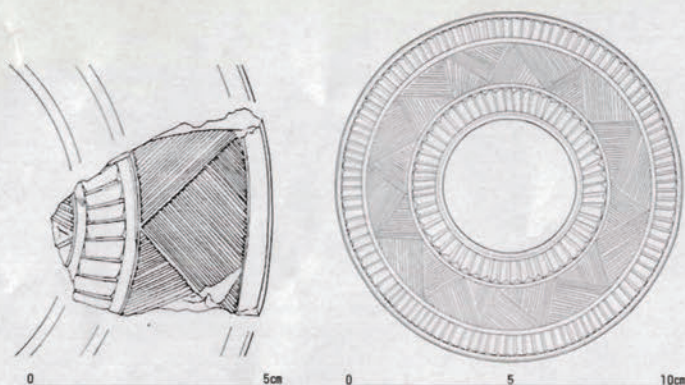




古墳時代の腕飾り

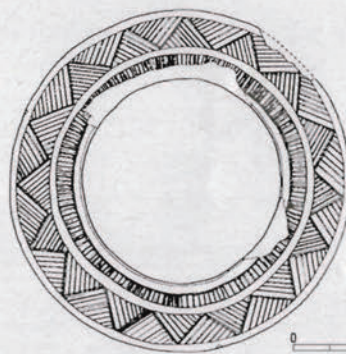
市原市草刈3号墳から古墳時代中期の石製腕飾りの1種である滑石製腕飾りが出土しています。石材はやや軟質の滑石で、縦4.4cm、横4.7cmの破片から推定される外径は17cm、内側の環状部の径は4cmです。表裏両面に複合鋸歯文や面違い文が彫刻されており、同じ村田川下流に位置する千葉市七廻塚古墳から出土した滑石製腕飾りと大きさや文様が良く似ています。このほか、同じような文様を持つ古墳時代の石製腕飾りは、近畿地方から出土した数例ほどが知られている程度です。なお、これらの遺物には共通して複合鋸歯文がつけられていますが、草刈3号墳と七廻塚古墳の出土例は、他とくらべて大型で偏平な点が特徴です。

(部 淳一)



市原市草刈3号墳出土 滑石製腕飾り

千葉市七廻塚古墳出土 滑石製腕飾り



奈良県奈良市 猫塚北1号墳出土石製腕飾り（『松林苑跡Ⅰ』奈良県立橿原考古学研究所発行より）



Q 先日博物館で、ムササビの形をした埴輪を見ました。大変珍しいものと聞きましたが、埴輪の中にはほかにどんな動物がいるのですか。
(第2回最新出土考古資料巡回展会場での質問より)

A 質問にあるムササビ形埴輪は、成田市みなみはとりしょうふくじ南羽鳥正福寺1号墳から出土しました。この古墳は、周囲に二重に堀を巡らした直径20.5m・高さ1.9mの円墳で、人物埴輪、動物埴輪のほか、多数の円筒埴輪が発見されました。この動物埴輪にはムササビのほかウマ、ニワトリ、タカ、水鳥、魚などさまざまな種類がありました。なかでも、ムササビ形埴輪は、全国でほかに類例を見ない珍しいもので、顔を上げ、背中を伸ばし、皮膚膜を広げた形は、ムササビが空中を滑空する姿を表現しているようです。口の両端が後方に裂ける表現も、リス科の動物の特徴を表しています。

一般に、動物埴輪にはこのほかにもイノシシ・シカ・イヌ・サルなどが見られ、イヌとイノシシが対になって



栄町竜角寺古墳群101号墳の復元埴輪列（県立房総風土記の丘提供）

いる例からは、豪族が生前行っていた狩猟の様子を表現していると言われています。

(石田 清彦・立和名 明美)

お知らせ

◎千葉県遺跡調査研究発表会◎

千葉県における遺跡調査の成果を公開する発表会と出土遺物の展示会を開催します。

●日時 平成11年1月31日(日) 午前10時～午後3時30分

●場所 千葉市文化センター(千葉中央ツインビル2号館)



■表紙について

壺
(市原市武士遺跡出土)
弥生時代中期(約1,900年前)、遺体を埋葬し、後に掘り起こして遺骨を集め、この壺に入れて再び埋葬した。
撮影：堀越知道

房総の 文化財

VOL. 18

平成11年2月26日

財団法人 千葉県文化財センター

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2

TEL 043-422-8811(代)

FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848

Bōsō no bunkazai



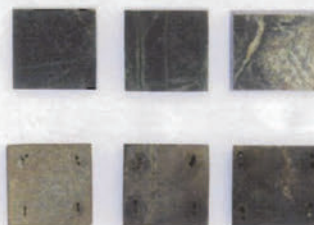
埋文アラカルト

せきせいおびかざ じゅんぽう 石製帯飾り(巡方)

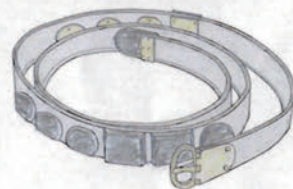
写真のタイルのような四角い石は、市原市草刈遺跡の平安時代の住居跡から発見された石製の帯飾り(巡方)です。

律令制の時代になると官人(役人)たちは、衣服の色や身につけるもので官位の差を表すようになります。当時の官人の帯は「銚帯」と呼ばれ、革製の帯に金属や石でできた方形(巡方)や半円形(丸鞠)の飾りを付けました。銚帯は、朝服と呼ばれる当時の正装や楽装束に用いられ、このうち石製の飾りが付いた帯を石帯と呼んでいます。残念ながら発掘調査では飾り部分のみが見つかることが多く、本来の姿は正倉院などに伝えられる帯から想像するしかありません。

石帯に用いられた石は、種類も様々で、大理石・水晶・



草刈遺跡出土石製帯飾り(巡方)



石帯復原図

瑪瑙・滑石などが出土しています。

これらの飾りは、細い銅線や鉄でベルト部分に固定されていました。銅線で固定するタイプは、裏側に銅線をとおすための潜り穴がけられていますこの部分はこわれやすかったようで、何度も穴をあけなおして使ったあとが窺えるものも見受けられます。市原市草刈遺跡出土の巡方は、潜り穴に銅線が残った状態で発見され、飾りの装着方法がわかる貴重な資料です。

(立和名 明美)

Q&A

Q 房総では瓦葺きの建物はいつごろからあるのでしょうか。また、古代の瓦からどんなことが分かるのでしょうか。

A 6世紀に仏教が中国から朝鮮半島を経て日本に伝来すると共に、瓦も伝えられました。房総では7世紀後半から瓦が葺かれた建物がみられ、その多くはお寺の建物です。

7世紀の中ごろまで大きな古墳を造っていた房総の豪族たちは、瓦を葺いた立派な金堂や五重塔の壮麗さに驚き、房総の地でも寺院の建立をはじめました。しかし、瓦を焼いたり、重い瓦を乗せてもつぶれない建物を造るためには高度な技術が必要であり、それらの技術をもった人を都から呼んできたり、作り方の指導をうけなければ作ることができませんでした。それで、それらの技術と共に軒先を飾る瓦の文様も伝わったのです。

瓦を細かく分析することによって、作り方から作った人々の特定や供給関係を知ることができ、中央の有力者と地方の豪族の結びつきや寺院の建てられた年代などを明らかにすることができます。

たとえば、印旛郡栄町龍角寺と木更津市上総大寺廃寺は、県内では最も古い寺院であり、7世紀後半に建てられたものです。龍角寺の瓦には奈良県桜井市の山田寺跡、上総大寺廃寺の瓦には、奈良県高市郡明日香村の川原寺から出土した

のきまるがわら軒丸瓦に最も近い文様がみられます。このように、軒丸瓦から房総の豪族たちと中央の豪族とのむすびつきをうかがうことができます。

(平野 雅一)



山田寺軒丸瓦



川原寺軒丸瓦



龍角寺軒丸瓦



上総大寺廃寺軒丸瓦



■表紙について
灰釉陶器浄瓶
(市原市草刈遺跡K区出土)
平安時代
仏・菩薩に浄水を供え
るための道具
撮影：堀越知道

お知らせ

当センターでは、下記タイトルのビデオライブラリー3巻を学校団体などに貸し出しております。お問い合わせ、お申し込みは、当センター資料部資料課まで。
(1)「古代と未来をつなぐ」(2)「弥生人と古墳の世界」(3)「都とむらのくらし」(各約20分)

房総の 文化財

VOL. 19

平成11年8月31日
財団法人 千葉県文化財センター
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811(代)
FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai



発掘調査速報

縄文時代早期の集落とキッチン

—八千代市間見穴遺跡—



間見穴遺跡上空から印旛沼低地を望む（南西から）

間見穴遺跡は、八千代市の北部を流れる新川（旧平戸川）を見下ろす台地上にあります。平成10年度までの調査で、旧石器時代から中・近世にかけての生活跡や遺物が多く見付き、長い時代にわたって人々が暮らしていたことがわかりました。

なかでも、縄文時代早期末（約7000年前）の竪穴住居跡4軒・炉穴27基・貝ブロック20か所などがま

とまって出土した例は、全国的に見てもめずらしく、当時の生活の様子を知る上で貴重な資料となっています。

この炉穴は、大人一人がゆったり入れるほどの大きさです。使い方は、穴の中で火をたいて食べ物を煮たり焼いたりする“半地下式キッチン”のようなものと考えられます。このころは家の外でも調理をしていたのでし

よう。貝ブロックは直径5mほどの大きさです。出土した貝の種類は、ハイガイ・マガキ・オキシジミをはじめとして、アサリ・ハマグリなどです。当時は、印旛沼まで海水が入り込んでいたので、縄文人はここで潮干狩りや魚とりをしていたのでし

よう。貝ブロックはその証です。今から約7000年前の“間見穴縄文人”は、眼下に広がる干潟と炉穴から立ち上る煙を眺めて、何を思っていたのでしょうか。



写真の炉穴は4基重なっており、火をたいた跡が5か所発見されました。全体の大きさは約4m×3m、深さは約1.1m。○は、火をたいた跡。



炉穴で調理しているようす（想像図）
イラスト／石井歌織



遺物紹介コーナー

古代人が書いた文字・墨書土器

—印西市鳴神山遺跡—



上の写真は、古代人が書いた文字です。すぐに読める文字もありますね。

このように、土器に墨で文字・記号・顔の絵などが書いてあるため、墨書土器と呼ばれています。

今回紹介するのは、鳴神山遺跡（北総・公団線：千葉ニュータウン中央駅南側）で見つかった墨書土器です。ここでは、奈良時代から平安時代初期（主に9世紀代）の土器がたくさん出土しました。そのうち、小さな破片も含めると

約600点の墨書土器が見つかりました。

墨書土器は、一つの土器に一文字で「大」①「富」②「依」③、二文字で「大加」④などと書かれています。これらの文字が書かれた墨書土器は、県内の遺跡でも数多く見つかっています。

さらに、一つの土器にたくさんの文字が書かれていたものもありました。写真⑤は、「丈部山城方〜」と書いてあります。「丈部山城」は

人名だろうと考えられています。そのほかに、「丈」「丈部」「丈尼」だけの墨書も見られ、この辺一帯を治めた一族・丈部姓を表したものだと言われています。これと同類の文字は、八千代市を流れる新川周辺の遺跡でも出土しており、注目されています。

古代人が残した墨書土器は、地名・人名を表したもののほかに、宗教的な儀式や、まじないなどに使われたと考えられていますが、まだ謎の多い分野です。



土器に書かれた文字

遺跡今昔物語

ひがしかつしか しゅううん 東葛飾—舟運から陸の交通へ— じょうばん 常磐自動車道発掘調査

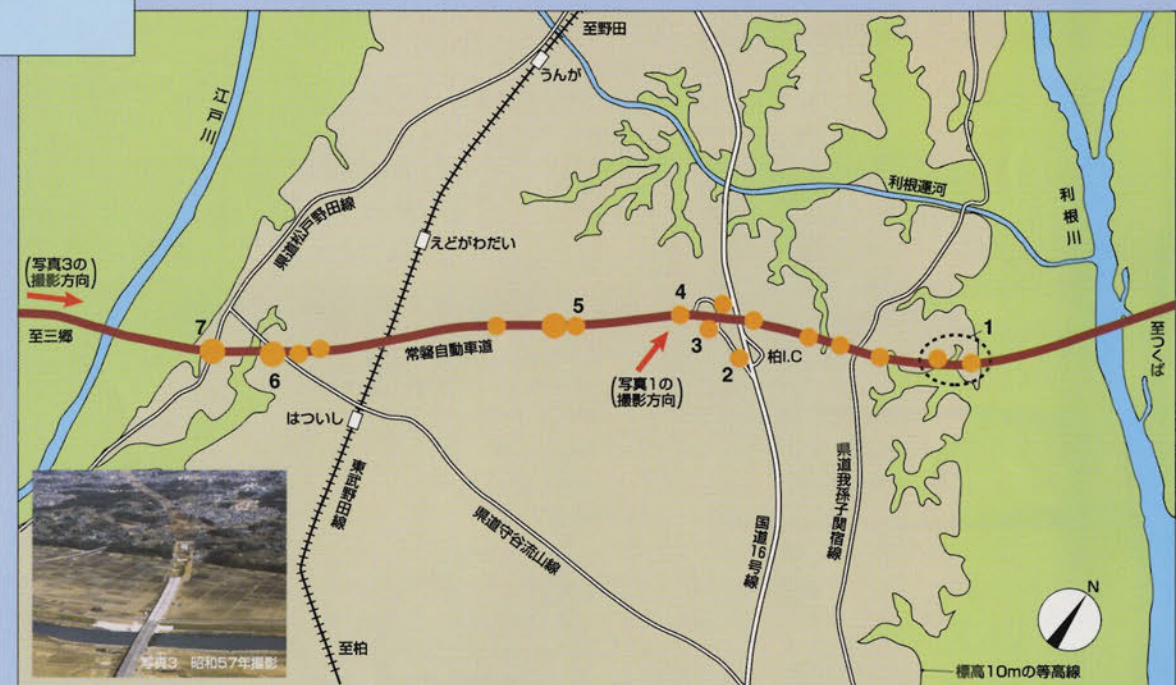
常磐自動車道は、埼玉県（三郷市）から千葉県・茨城県を経て福島県（いわき市）まで続く全長約190kmの高速道路です。このうちの8.6kmが県北西部の柏市と流山市を通っています。

道路の建設工事に先立って行われた発掘調査は、昭和52年から57年までの5年間にわたり、17の遺跡に及びました。

調査は、利根川に近い遺跡から始められ、江戸川に向かって進められました。調査の結果、旧石器時代後期（約3万年～1万2千年前）から江戸時代にわたる、様々な時代の遺構（生活や施設の跡）と遺物を見つけることができました。中でも、花前遺跡の「鉄づくりのムラ」の発見は、話題を呼びました。現在、遺物の一部は県立上総博物館（木更津市）や当センター資料室（四街道市）などで見るができます。

江戸時代以降、この地は江戸川と利根川の舟運で大いに栄えました。とりわけ、高瀬舟による定期航路は重要な位置を占め、大量の物資を江戸にもたらしました。近代になると、蒸気船が運航されますが、高瀬舟はいまだ舟運の中心で、大正時代（関東大震災の前）まで活躍しました。その後、舟運は急激に衰えます。

現在、この地域はすっかり陸の交通に移り変わり、都心に隣接したベッドタウンとして、新たな町作りが計画されています。



1. 花前遺跡
平安時代の鉄づくりのムラ
江戸時代の屋敷跡
2. 元割遺跡
旧石器時代の生活跡
3. 聖人塚遺跡
旧石器時代の生活跡
4. 中山新田Ⅰ遺跡
旧石器時代の生活跡
5. 馬土手
流山市青田に所在
江戸時代の放牧場の周囲にめぐらされた土手跡
6. 若葉台遺跡
縄文時代前期のムラと貝塚
7. 上貝塚遺跡
（現在の桐ヶ谷南割遺跡の一部）
古墳時代後期のムラ



写真1：昭和55年撮影

工事と発掘調査が同時に進む。柏インター・チェンジ付近



写真2：平成11年撮影／千葉県環境

現在の常磐自動車道柏インター・チェンジ上空

科学の目コーナー

—赤外線テレビカメラ装置の話—



肉眼では文字は見えません



赤外線をあてると文字が見えます

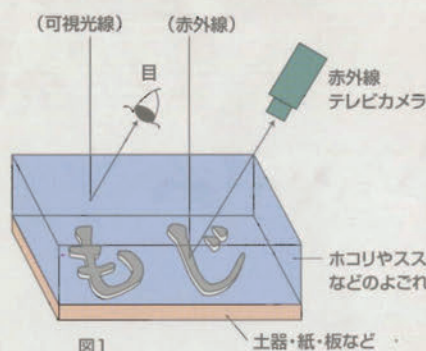


図1



赤外線テレビカメラ装置

ワープロで打ち出した「赤外線」という文字を、サインペンで塗りつぶしてみました。肉眼で見ると、左の写真のように下の文字は見えません。しかし、赤外線テレビカメラ装置で撮影すると、右の写真のように、塗りつぶした文字がはっきりと見えます。

私たちが肉眼で見ることのできる光（可視光線）は、インクなどのよごれの層に邪魔されてしましますが、赤外線はよごれの層を通りぬけて下の文字にまで届きます（図1）。これを赤外線テレビカメラ装置で撮影すると、目では見えない文字が見えるようになるのです。

文化財の分野では、木簡・漆紙文書（漆液を入れた容器の蓋紙として使用された反故文書＝不用になった文書類）・土器の墨書・絵馬・天井画など、ホコリやスス、漆などで

文字や絵が見えなくなっている資料の調査に、赤外線テレビカメラ装置を利用しています。文字や絵などの上に付着したものを落とさずに見ることができるので、大切な資料をいためずに調べることができます。

また、下の写真のように、消えかかった文字をはっきり見たいときにも利用しています。



肉眼でははっきりしない墨書（左）が、赤外線をあてるとクッキリと見えます（右）



お知らせコーナー

●『今、古代史が面白い』

—出土文字からさぐる房総の古代—

★財団法人千葉県文化財センター設立25周年記念展★のご案内

古代の人々は、いろいろな思いで文字を書き記しています。本号で紹介した印西市鳴神山遺跡から出土した墨書土器もその一つです。不思議なことに、千葉県は、墨書土器の出土例が最も多い県です。今回の展示会では、墨書土器から房総の古代の歴史をさぐります。

■さわやかちば県民プラザ

展 示：平成11年10月2日（土）～10月17日（日）

フォーラム：平成11年10月17日（日）**無料。申込みは下記資料課まで**

交 通：〔JR常磐線・東武鉄道野田線〕柏駅西口から東武バス2番乗り場
「柏の葉公園経由国立がんセンター」行き20分、「柏の葉公園」下車徒歩1分

■千葉県立安房博物館

展 示：平成11年10月30日（土）～11月28日（日）

講 演 会：平成11年11月23日（火）〔勤労感謝の日〕

交 通：〔JR内房線〕館山駅西口から徒歩10分

●問い合わせ：（財）千葉県文化財センター資料課 ☎043-422-8811（代表）

*「設立25周年記念展」は、12月に千葉県立大栄根博物館においても開催いたします。詳しくは、広報紙20号でお知らせします。



●発掘調査遺跡見学会のご案内

会場：市川市堀之内南遺跡

（市川市堀之内2丁目：市立市川考古博物館そば）

日時：平成11年9月11日（土）午後1：30から3：30まで

内容：低湿地遺跡（主に縄文時代）の現地見学と遺物の展示
問い合わせ：（財）千葉県文化財センター西部調査事務所

☎0471-56-0440

●ビデオ・ライブラリーを授業などに活用してみませんか！

当センター制作のビデオテープを学校団体などに貸し出しております。

問い合わせ・申込みは、当センター資料課まで。

内容は次のとおりです。

- ①『古代を未来につなぐ』〈文化財センターの仕事〉
- ②『房総の誕生と狩猟採集生活』〈旧石器時代から縄文時代〉
- ③『弥生人と古墳の世界』〈弥生時代から古墳時代〉
- ④『都とむらのくらし』〈奈良・平安時代〉 【各約20分】

■表紙について

- ①⑤⑦⑧（柏市花前Ⅰ・Ⅱ遺跡出土杯）、②⑥（木更津市久野遺跡出土杯）、③④（栄町大畑Ⅱ-1遺跡出土杯・平瓦）

撮影：堀越知道



房総の 文化財

VOL.20

平成11年11月30日
財団法人 千葉県文化財センター
〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2
TEL 043-422-8811(代)
FAX 043-422-8850

ISSN 0919-0848
Bōsō no bunkazai



発掘調査速報

縄文時代中期のムラの中心人物

—千葉県有吉南貝塚—



装身具を身に付けた男性人骨

有吉南貝塚は、千葉市緑区役所近くの台地上にあります。ここは、縄文時代中期後半（約4500年前）の大きなムラの跡です。直径約100mの馬蹄形の貝塚が見つかり、その周辺に、^{たてあなじゅうじょ}堅穴住居や貯蔵用の穴がたくさんあったことがわかりました。

平成10年度にその一部を調査したところ、埋葬された人骨が、ほぼ完全な状態で発見されました。頭は北西を向き、土器がかぶせられていらうえに、手足は写真のように折り曲げられていました。これら

は、「^{かめかぶりそう}甕被葬」及び「^{くっそう}屈葬」と呼ばれ、縄文時代に見られる埋葬の仕方です。

この人骨は男性で、縄文時代の成人男性の平均身長（約157cm）と比べて、かなり背が高かったようです。

男性の腰の辺りからは、イルカの下顎の骨で作った装身具（表紙写真）が出土しました。これには、非常に細かい文様が施されており、赤く塗った痕も一部残っていました。

左手の近くでは、イモガイ（巻貝の一種）の貝殻を輪切りにし、小さな穴をあけて作った装身具も見つかりました。

ここで紹介したような装身具が見つかることは大変珍しく、当時でも貴重な宝物だったことでしょう。その宝物を身に付けていたこの男性は、狩りのリーダーや村長のような重要な立場の人だったのかもしれませんが、ムラ人たちは、中心人物を亡くした悲しみに耐えながら、^{ていちょう ほうむ}丁寧に葬ったのでしょう。



空から見た有吉南貝塚（南から）



イモガイ製の装身具

遺物紹介コーナー

つむ わざ ぼうすいしゃ 糸紡ぎの技・紡錘車

—千葉県高沢遺跡—

昭和の初めころまで、^{はた お}機織りは農家などで折り見られる光景でした。また、糸を紡いだり、機織りをする人は人々にとって身近で、重要な仕事でした。

機を使って布を織るようになったのは弥生時代からと考えられています。機は木製のため、遺跡からはほとんど見つかりませんが、糸を紡ぐときに使われる紡錘車は堅穴住居跡などから見つかっています。

布を織るためには太さのそろった、しっかりした糸が必要です。室町時代（16世紀以降）に^{めんかさいばい}綿花栽培が盛んになるまでは、カラムシ（苧麻）という植物が絹と並んで糸の主な原料でした。カラムシの皮から繊維をとり、長くつないで糸にしますが、そのままでは弱いので、ねじって撚りをかけます。紡錘車はこの作業に使われま



した。
^{えんぱんがた}円盤形をした紡錘車の中心に軸を差し込み、^{じく}端に撚りのかかっていない繊維を掛けます。端を持ってぶら下げ、繊維がぴんと張った状態で紡錘車を回すと繊維も回り、撚りがかかります。出来上がった糸は次々と軸に巻き取っていきます。



鉄製の紡錘車を使い、麻に撚りをかける様子。（菱川師宣「和国百女」より転載）

この紡錘車はいろいろな材質で作られました。土製のもの、石・木・動物の骨製のもの、土器の破片を再利用したものなどがあります。軸は木と思われますが、ほとんど残っていません。時代によっては紡錘車と軸を鉄で作ったものもあります。また、大きさや重さも様々で、糸の太さに合わせて作られたと考えられます。

手のひらに載せると、すっぽりと収まる大きさのものがほとんどです。その心地よい重さは、遠い昔の手仕事のぬくもりを伝えてくれるようです。



◎遺跡今昔物語◎

—とね 利根の恵みを受けて— とうそう 東総用水発掘調査

東総用水は、東総台地の農業用水と水道水の確保のために作られました。この用水工事に伴って、^{とうのじょうまち たかべ あやの まえ}東庄町の^{いまごおりか ちうちせ き おぞ}高部宮ノ前遺跡、今郡カチ内遺跡、小座ふち遺跡、青馬前畑遺跡の4遺跡の発掘調査が、昭和56年から57年にかけて行われました。

それまで東庄町では、発掘調査はほとんど行われたことがなかったため、最初のころは見学者が毎日のように訪れていました。発掘調査に初めて携わった地元の補助員さんも「いったい、これからどんな仕事をするのだろうか」と不安げな様子でした。

しかし、調査が進むにつれて、この辺りは、はるか旧石器時代の昔から人が住み始めていたことがわかってきました。また、今郡カチ内遺跡で見つかった縄文時代早期（約7000年前）の土器の中には、「日計式」という東北地方を中心に作られた土器が含まれており、利根川以南では初めての発見となりました。この土器は、当センター（四街道市）の展示室で見ることができます。

また、弥生時代や古墳時代をはじめとして、奈良・平安時代の大規模なムラの存在も明らかにしています。紹介した遺跡の近くには、国の史跡に指定されている小見川町の阿玉台貝塚や良文貝塚などがあります。

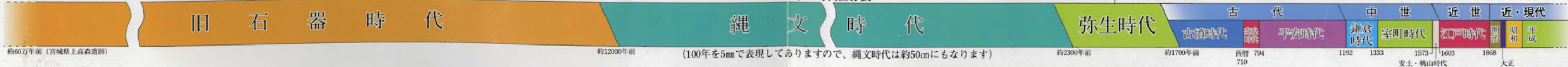
このように、東総用水の工事に伴う発掘調査によって、東庄町にも古くから人々の生活があったことがわかりました。



- 1. 高部宮ノ前遺跡**
縄文時代から中世までの幅広い時代にわたる遺跡。弥生時代、古墳時代のムラが発見される。
- 2. 今郡カチ内遺跡**
旧石器時代から人が住んでいたことを確認。縄文時代早期の「日計式土器」が見つかる。
- 3. 小座ふち遺跡**
縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡。住居跡も発見。
- 4. 青馬前畑遺跡**
縄文時代から奈良・平安時代にかけての遺跡。

日本の時代区分表

BC（紀元前） AD（紀元後）





埋文レポートコーナー

市川市堀之内南遺跡見学会

「どうめき谷津に古代をさぐる」と題して、遺跡発掘調査の見学会が9月11日(土)に開催され、約200人の参加がありました。

堀之内南遺跡は、堀之内貝塚(国指定史跡)に隣接する低湿地遺跡で、昨年の10月から確認調査を続けています。

当日は、現在の地表面から数m下に、縄文時代晩期(約3000年前)の土器と木の実と一緒に出土している様子や、古墳時代の流木と木の根が一面に広がっている様子を説明しました。また、今回の調査で発見した木製品や土器などの遺物も、市立市川歴史博物館に展示しました。見学者は、間近に展示された原始・古代の遺物を熱心に見入っていました。



発掘調査の様子



遺跡の説明を受ける見学者

お知らせコーナー

●『今、古代史がおもしろい』

—出土文字からさぐる房総の古代—

★財団法人千葉県文化財センター設立25周年記念事業★のご案内

古代の人々は、いろいろな思いで文字を書き記しています。19号で紹介した印西市鳴神山遺跡から出土した墨書土器もその一つです。不思議なことに、千葉県は、墨書土器の出土例が最も多い県です。今回の記念事業では、墨書土器から房総の古代の歴史をさぐります。

■千葉県立大利根博物館

展示期間：平成11年12月4日(土)～平成12年1月9日(日)

月曜日休館。年末年始休館。

講演会：平成11年12月19日(日)午後2：00から。

演題「墨書土器と古代の北総」

講師／市原市埋蔵文化財調査センター所長栗田則久氏

定員80名、先着順。参加費無料。

交通：①JR成田線佐原駅から、水郷観光バス「水生植物園入口」下車約600m
(バスの運行数が少ないので要注意)

②東関東自動車道「潮来IC」から約5km

③東関東自動車道「佐原香取IC」から約10km

●問い合わせ：(財)千葉県文化財センター資料課 ☎043-422-8811(代表)

●平成11年度千葉県遺跡調査研究発表会

日時：平成12年1月23日(日)午前10：00から午後3：30

会場：千葉市文化センター／ホール(研究発表会)・同市民サロン(展示)
【中央区中央2-5-1・千葉中央ツインビル2号館内】

内容：千葉県内の各文化財センターなどにおける、近年の埋蔵文化財発掘調査の成果を公開します。遺物の展示も行います。

費用：無料。申込み：不要

●問い合わせ：当センター企画課 ☎043-422-8811(代表)

ちばまなびフェスティバル'99 “原始・古代フェア”

県内の文化・芸術団体の催しが、9月25・26日に幕張メッセ国際展示場で開催されました。

当センターをはじめとして、県内の文化財センターは共同で、来場者に楽しく原始・古代を学習してもらおうと、「勾玉作り」「縄文時代の衣服の試着」「縄文土器の文様をつける」などの体験コーナーを設け、注目を集めました。



勾玉の出来上がり

フォーラム『今、古代史がおもしろい』

当センター設立25周年記念事業

柏市にある「さわやかちば県民プラザ」で、10月17日に開催されました。国立歴史民俗博物館教授平川南氏をはじめとして、県内の古代史に詳しい研究者をパネリストに迎え、出土文字をテーマに討論が行われました。

当日は、約170名の参加があり、古代房総の出土文字の研究成果に熱心に耳を傾けていました。



基調講演をする平川南氏

●ビデオ・ライブラリーを 授業などに活用してみませんか！

当センター制作のビデオテープを学校団体などに貸し出しております。

問い合わせ・申込みは、当センター資料課まで。
内容は次のとおりです。

- ①『古代を未来につなぐ』〈文化財センターの仕事〉
- ②『房総の誕生と狩猟採集生活』〈旧石器時代から縄文時代〉
- ③『弥生人と古墳の世界』〈弥生時代から古墳時代〉
- ④『都とむらのくらし』〈奈良・平安時代〉 【各約20分】

なお、ビデオ・ライブラリーは、千葉県視聴覚センター(千葉市美浜区)・県立高等学校視聴覚ライブラリー・県立博物館・県内各法人文化財センターなどにも配布してあります。

■表紙について

イルカ下顎骨製装身具(千葉市有吉南貝塚出土)

縄文時代中期。詳しい用途は不明。

およその計測値／長さ22.6cm、幅8.5cm、厚さ3～4mm、重さ41g。(表紙写真は、ほぼ原寸大)

撮影：堀越知道